

平成21年6月12日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2005～2008

課題番号：17320072

研究課題名（和文） 日本語の対人配慮表現の多様性

研究課題名（英文） The Variety of Politeness in Japanese Language.

研究代表者

野田 尚史（NODA HISASHI）

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：20144545

研究成果の概要：

現代日本語文法、音韻論、古典語、方言、社会言語学などの各分野から、述べ19名の研究者の参加し、古典語など、ほぼ未開拓であった領域を含む対人配慮表現の研究の方法論を次々と開拓することができた。とりわけプロジェクトの集大成である、社会言語科学会における10周年記念シンポジウムの研究発表では高い評価を得た。その内容が書籍として出版されることが決定している。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	2,300,000	0	2,300,000
2006年度	2,700,000	0	2,700,000
2007年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2008年度	2,500,000	750,000	3,250,000
総計	10,100,000	1,530,000	11,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語・対人配慮・多様性・通時性・社会性・メディア・談話・地域差

## 1. 研究開始当初の背景

対人配慮に関わる言語表現の研究は、それぞれの言語において、画一的に捉えられ、一言語内の多様性に注目されることはなかった。特に古典語における配慮表現の多様性研究は、全世界で立ち遅れていた。そのなかで、世界でも有数の古典資料を有する、日本語古典の配慮表現研究は、大きな意義があった。しかしながら、古典テキストに現れる配慮表現は、ごく限られた貴族や武家などの身分社会のものであり、時代によってコミュニケーションの書記意識も変動的であるという問題点を抱えていた。そのなかで、古典テキス

トを言語資料として、どの程度活用できるかという面で、不明な点が研究者間に多くあった。

一方、現代語においては、語用論の方法論が発達していたが、大学生のデータなどをもって、各言語の性質を論じるなど、言語内の多様性に目を向けるということは皆無に近かった。さらに、社会的行動である対人配慮の言語行動の分析に、話者や地域の社会性という変数を導入することもほとんどなかった。

## 2. 研究の目的

研究開始当初の目的は、大きくは次の2つを考えていた。

- (1) 配慮表現の多様性の解明（地域差、世代差、時代差など）
- (2) 配慮表現が変化するメカニズムの解明（通時的变化の方向、地域差・世代差との関係など）

この研究成果は、研究期間終了後、くろしお出版から『日本語の対人配慮表現の多様性—地域差・世代差・時代差—』（仮題）として出版する予定であった。

そして、この研究は、次のような位置づけで、これまでの研究を大きく変えようとするものであった。

- (1) 日本語の対人配慮表現の多様性を共時と通時の両面から統一的に捉え直す。
- (2) 文法形式を統語的な観点からではなく、コミュニケーションの手段として捉え直す。

以上のような目的を持って、研究を開始した。

## 3. 研究の方法

対人配慮が社会的行動であることを確認したうえで、依頼—受諾、依頼—拒否、勧誘—受諾、勧誘—断り、受益—感謝、などといった、発話行為単位での分析をするというコンセンサスをメンバー間で形成した。

また、古典を扱う場合には、「1. 研究開始当初の背景」で述べたような、資料体となる文芸作品のテキストの性質に、時代による差異が大きくなることが問題になった。

しかし、まずは発話行為単位での作品中の言語表現を大量に集めることから、研究活動を開始した。その資料を、上代、中世、近世と時代別に収集し、各時代の配慮表現上の特徴を探った。

現代語においては、アンケートによる量的調査、電話によるロールプレイ会話を実施した。アンケート調査は、東日本・西日本など、配慮表現のマクロな地域差を立証するための調査、全国の市町村を対象にした地域網羅的な調査、話者の居住地の都市性を問題にした調査を実施した。さらに、携帯メールでの謝罪に対する「許し」の表現について、日本語とイギリス英語とを対照する実験を行った。また、若年層を対象に、「対人配慮」という言語行動意識そのもののバラエティを把握する調査も実施している。

ロールプレイ会話調査では、東北、関西、沖縄などを調査地点として、談話展開や配慮の演技性などを分析対象とした調査を実施している。

これらの手法によって収集された発話・会話を、コミュニケーション上の機能的要素に分解し、それぞれの要素のバラエティと量的

な出現傾向を見ることで、多様性の構造を明らかにする方法を取った。

## 4. 研究成果

上記のような目的と方法から得られた知見は次のようなものである。

通時的な観点からは、古代語では見られなかった依頼や断りの際に、対人配慮を表すために用いられる「すみません」「悪いんですけど」「無理を言いますが」などの前置き表現が、中世以降見られるようになることが明らかになった。

この点について、貴族だけの閉じられた社会から、多方面の人々と交流する開かれた社会に日本が移行するに当たって、対人配慮を表現する必要が高まったが、日本語の文構造上、文末にはその表現を挿入する余地がないため、前置きによって配慮が示されたという説を立てるに至った。

配慮表現の現代的多様性として、方言の地理的多様性に通じる東西差が確認された。日本語の東西差は、言語形式だけでなくコミュニケーション上の特徴においても見られることが明らかになった。さらに、地域差だけでなく、話者の居住地の都市性などに起因する、日常の対人関係のあり方の違いが関与していることが明らかになった。都市部の開かれた社会で、配慮表現の定型性が確認されたことは、通時的变化に通じるものがある。

ロールプレイ会話では、対人配慮の形として「察しあい」の配慮が求められるため、「先の読める予定調和の談話展開」がなされている。これによって会話が儀礼的になることと、もう一方の配慮である生きた創造的会話を生み出すこととのせめぎあいがなされている。

さらに、メディア的なアプローチとしては携帯メールでの謝罪に対する許しが分析された。そこでは相手を「思いやる」配慮表現が多用されるが、思いやることと相手を許すことは必ずしも一致しないことが確認された。このような傾向はイギリス英語よりも日本語において多く見られ、日本語の配慮表現では、本心の「察し」が求められる。このことは相手に不安を抱かせることになり、さらなる配慮がされることが示された。

以上、歴史的・地理的・社会的・談話的・メディア的多様性のあり方から、日本語の対人配慮の言語行動の多面性と、成立の経緯についての知見が得られた。

このような日本語の対人配慮表現のあり方は、多元ごとの比較によってより鮮明になるものと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 20 件)

- ① 野田尚史, 日本語非母語話者の待遇コミュニケーション—デスマス形と非デスマス形の運用を中心に—, 待遇コミュニケーション研究, 6号, pp.113-126, 2009, 査読あり
- ② 木村義之, 明治時代前期の「断り」表現, 日本語と日本語教育, 37号, pp.7-25, 2009, 査読なし
- ③ 高山善行 『平家物語』の対人配慮表現—「断り」表現を中心に—福井大学, 国語国文学, 48号, pp.63-70, 2009, 査読なし
- ④ 三宅和子, ケータイ方言—ハイブリッドな対人関係調整装置—, 国文学, 53(5), pp.92-103, 2008, 査読なし
- ⑤ 三宅和子, 若者のコミュニケーションと日本語教育, BATJ Journal, British Association for Teaching Japanese as a Foreign Language, 9号, pp.45-53, 2008, 査読なし
- ⑥ 野田尚史, コミュニケーションのための日本語教育文法—日本語教育の常識を疑おう—, 国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要, 4号, pp.1-18, 2007, 査読あり
- ⑦ 小林 隆, 文法的発想の地域差と日本語史, 『日本語学』, 26(11), pp.76-83, 2007, 査読なし
- ⑧ 西尾純二, 罵りとその周辺の言語行動, 『ことばのコミュニケーション』(共著書), pp.194-208, 2007, 査読なし
- ⑨ 三宅和子, 携帯メールに現れる方言—『親しさ志向』をキーワードに—, 日本語学, 25(1), pp.18-31, 2006, 査読なし
- ⑩ 尾崎喜光, 依頼・勧めに対する受諾における配慮の表現, 言語行動における「配慮」の諸相(共著書), pp.55-88, 2006, 査読なし
- ⑪ 西尾純二, 待遇表現の量的調査における回答の「ばらつき」について, 『言語文化研究論集』愛知学院大学言語文化研究会, 逐次刊行物, 2006, pp.112-123, 査読なし
- ⑫ 森山由紀子, 日本語における対者敬語の成立—『古今和歌集』詞書にみる「ハベリ」文法化の過程—, 『語用論研究』, 8号, 2006, pp.93-107, 査読あり
- ⑬ 森山由紀子, 『蜻蛉日記』消息文の「侍り」—会話文との比較から—, 『同志社女子大学日本語日本文学』, 18, pp.1-15, 2006, 査読なし
- ⑭ 森野 崇, 桐壺帝の依頼表現, 『源氏物語の始発—桐壺巻論集』(共著書), pp.488-509, 2006, 査読なし
- ⑮ 野田尚史, 現代日本語の主張回避形式—

「若いから かなだろう」と、断られた」の「か」「だろう」「と」—, 『日本語文法』, 7(1), pp.36-51, 2006, 査読あり

- ⑯ 金沢裕之, 近代語—話しことばにおける文の内部の丁寧さ, 国文学 解釈と教材の研究, 50(5), pp.25-32, 2005, 査読なし
- ⑰ 岸江信介, 関西中央部方言の中の敬語, 日本語学, 24(11), pp.124-134, 2005, 査読なし
- ⑱ 高山善行, 助動詞「む」の連体用法について, 日本語の研究, 1(4), pp.1-14, 2005, 査読あり
- ⑲ 日高水穂, 敬うことば・へりくだることば, 日本語のバラエティ(共著書), pp.72-77, 2005, 査読なし
- ⑳ 三宅和子, 携帯電話と若者の対人関係, 講座社会言語科学2 メディア(共著書), 2005, pp.136-155, 査読あり

[学会発表] (計 5 件)

- ① 野田尚史(コーディネート)・高山善行・西尾純二・日高水穂・三宅和子, 学会設立10周年記念シンポジウム「配慮言語行動研究の新地平—歴史的・社会的・コミュニケーション的アプローチの連携から見えるもの—」, 社会言語科学会, 2009年3月28日, 東京外国語大学
- ② 野田尚史, 配慮したつもりなのにより印象を与えない日本語非母語話者の配慮表現, 第7回日本語教育国際研究大会, 2008年7月13日, 韓国釜山
- ③ 野田尚史, 日本語非母語話者の待遇コミュニケーション, 待遇コミュニケーション学会, 2008年3月15日, 早稲田大学
- ④ 野田尚史(コーディネート)・藤原浩史・米田達郎・岸江信介, パネルセッション「依頼表現の歴史的変化と地理的変異」, 日本語文法学会, 2008年10月19日, 甲南大学
- ⑤ Kazuko Miyake, Apologies and Relational Work in Mobile Phone Messages. 12<sup>th</sup> International Conference of EAJS(European Association for Japanese Studies), 2008年9月22日, Lecce, Italy

[図書] (計 3 件)

- ① 野田尚史, コミュニケーションのための日本語教育文法, くろしお出版, 221p., 2005
- ② 野田尚史, なぜ伝わらない, その日本語, 岩波書店, 202p., 2005
- ③ 小林 隆, 方言が明かす日本語の歴史, 岩

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野田 尚史 (NODA HISASHI)  
大阪府立大学・人間社会学部・教授  
研究者番号：20144545

(2) 研究分担者

小林 隆 (KOBAYASHI TAKASHI)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：00161993  
日高 水穂 (HIDAKA MIZUHO)  
秋田大学・教育文化学部・准教授  
研究者番号：80292358  
岸江 信介 (KISHIE SHINSUKE)  
徳島大学・総合科学部・教授  
研究者番号：90271460  
尾崎 喜光 (OZAKI YOSHIMITSU)  
国立国語研究所・研究開発部門・主任研究員  
研究者番号：10204190  
西尾 純二 (NISHIO JUNJI)  
大阪府立大学・人間社会学部・准教授  
研究者番号：60314320  
高山 善行 (TAKAYAMA YOSHIYUKI)  
福井大学・教育地域科学部・教授  
研究者番号：90206897  
平成 17 年度から平成 19 年度まで  
森野 崇 (MORINO TAKAKI)  
二松学舎大学教授・文学部・教授  
研究者番号：50277365,  
平成 17 年度から平成 19 年度まで  
森山 由紀子 (MORIYAMA YUKIKO)  
同志社女子大学・学芸学部・教授  
研究者番号：20197487  
平成 17 年度から平成 19 年度まで  
金澤 裕之 (KANAZAWA HIROYUKI)  
横浜国立大学・教育人間科学部・教授  
研究者番号：00201426  
平成 17 年度  
藤原 浩史 (FUJIWARA HIROSHI)  
中央大学・文学部・教授  
研究者番号：00219065  
平成 18 年度から平成 19 年度

(3) 連携研究者

藤原 浩史 (FUJIWARA HIROSHI)  
中央大学・文学部・教授  
研究者番号：00219065  
平成 20 年度  
高山 善行 (TAKAYAMA YOSHIYUKI)  
福井大学・教育地域科学部・教授

研究者番号：90206897

平成 20 年度

森野 崇 (MORINO TAKAKI)  
二松学舎大学教授・文学部・教授  
研究者番号：50277365  
平成 20 年度  
森山 由紀子 (MORIYAMA YUKIKO)  
同志社女子大学・学芸学部・教授  
研究者番号：20197487  
平成 20 年度  
前田 広幸 (MAEDA HIROYUKI)  
奈良教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：40219275  
平成 20 年度  
三宅 和子 (MIYAKE KAZUKO)  
東洋大学・文学部・教授  
研究者番号：60259083  
平成 20 年度  
小柳 智一 (KOYANAGI TOMOKAZU)  
福岡教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：80380377  
平成 20 年度  
福田 嘉一郎 (FUKUDA YOSHIICHIRO)  
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：30275458  
平成 20 年度  
青木 博史 (AOKI HIROFUMI)  
京都府立大学・文学部・准教授  
研究者番号：90315929  
平成 20 年度  
米田 達郎 (YONEDA TATSURO)  
大阪工業大学・知的財産学部・講師  
研究者番号：30454557  
平成 20 年度  
半沢 康 (HANZAWA YASUSHI)  
福島大学・人間発達文化学類・准教授  
研究者番号：10254822,  
平成 20 年度  
木村 義之 (KIMURA YOSHIYUKI)  
慶應義塾大学・日本語日本文化教育センター・准教授  
研究者番号：90234385  
平成 19 年度から 20 年度

※以下、研究協力者

前田 広幸 (MAEDA HIROYUKI)  
奈良教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：40219275  
平成 17 年度から 19 年度  
三宅 和子 (MIYAKE KAZUKO)  
東洋大学・文学部・教授  
研究者番号：60259083  
平成 17 年度から 19 年度まで

小柳 智一 (KOYANAGI TOMOKAZU)  
福岡教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：80380377  
平成17年度から19年度  
福田 嘉一郎 (FUKUDA YOSHIICHIRO)  
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：30275458  
平成17年度から19年度  
青木 博史 (AOKI HIROFUMI)  
京都府立大学・文学部・准教授  
研究者番号：90315929  
平成17年度から19年度  
米田 達郎 (YONEDA TATSURO)  
大阪工業大学・知的財産学部・講師  
研究者番号：30454557  
平成17年度から19年度  
木村 義之 (KIMURA YOSHIYUKI)  
慶應義塾大学・日本語日本文化教育センター・准教授  
研究者番号：90234385  
平成19年度